土屋　博　編著　『聖と俗の交錯　宗教学とその周辺』
（北海道大学図書刊行会、１９９３年、２４０頁）

芦名　定道

本書は編者土屋氏を中心とした北海道大学文学部宗教学研究室における研究会の成果がまとめられたものである。この書評では、まず本書のねらいと構成を序論とあとがきにしたがってまとめ、続いて各章の内容の紹介とコメントを行い、最後に本書全体に関する感想を述べることにしたい。

一

本書の基本構想は、現代宗教学の批判的反省（序論）に基づいた、「現在までのところ、宗教現象に共通する概念で、聖概念に代わりうるものは見あたらない。……聖俗二分法は今もって考察の出発点となりうる」（二五頁）という認識にしたがって提示される。すなわち、聖の俗の交錯する文化の地平にその座標軸をさぐる「現代的な学問である宗教学」の試みは、「既存の分野の再編」を「周辺領域の接点」を明確化する作業を通して遂行されねばならない。これはきわめて意欲的な企画と言える。そのために、本書の議論は従来の宗教学のスタンダードなテーマの紹介ではなく、むしろ宗教学の「境界領域」から「中心部分」を照射することを目指して行われる。各章の議論はこの問題設定から理解されねばならない。こうした「聖俗二分法」と「周辺から中心へ」という視点に加えて、本書では、通時と共時の組み合わせという視点が導入される。第一部では宗教が古代から現代にいたる思想史の通時的展開の中で論じられ、また第二部では、現代という共時的な時間平面上で宗教が問題にされる。以上より、序論に続く本書の構成は次のようになる。

第一部　思想史における聖なるもの
第二部　現代世俗社会における聖なるもの

二

まず、序論では現代の宗教的状況（「宗教ブーム」）の分析に典型的に現れた宗教の概念規定の困難さの指摘に続いて、近代的な学としての宗教学の成立の歴史的経緯がまとめられる。啓蒙主義の宗教批判を起点とした宗教学的意識の誕生、ミュラーによる独立した学問としての宗教学の提唱、宗教起源論の展開、そして宗教社会学、宗教心理学、宗教現象学の成立といった事柄が順にたどられる。こうした現代宗教学の学説史の紹介は限られた紙面の中で適切に行われており、信頼できる内容である。とくに、ミュラーの宗教学の批判的紹介はこの序論のすぐれた特徴と言えよう。しかし、序論の目的は、こうした歴史の概観によって、現代宗教学の直面している方法的ディレンマを取り出すことにある。近代啓蒙主義から出発した経験科学としての宗教学が現代の多様化しつつある宗教現象を理解するのに適切な方法を与え得るのか、この多様な現象を学問的手続きによっていかに解明できるのか、こうした問題が今問われていることを土屋氏は指摘する。これに対して、氏はデュルケム、オットー、エリアーデにおける「聖」の概念を検討した上で、宗教学の方法的ディレンマの解決を「聖俗二分法」を起点として行うよう提案する。この序論に関して感じるのは、啓蒙的な学の理念に基づく宗教学と宗教哲学と神学の三者の関係が結局

どのように理解できるのか、またこの問いとの関連でしばしば言及される岸本やワッハの図式はどれほどの有効性を有するのか、という疑問である。

第一部に移ろう。これには宗教思想を歴史意識から論じた第一章、社会思想史から論じた第二章、近代科学思想から論じた第三章の三つの論文が含まれる。

第一章では、古代ギリシアの歴史意識（正確には循環的時間と自然に束縛された反歴史性）と旧約的な直線的歴史意識の対比からはじまって、初期キリスト教の終末論的意識が中世カトリシズムにおいて一方では中和されつつも、他方では千年王国運動として反復された事情（「中和化された救済史」と宗教的異議申し立て）が検討され、最後に近代的な進歩史観の成立が論じられる。こうした議論の枠組み自体は決して目新しいものではないが、この章の特徴は中世歴史意識の中で説明された「愛の救済史」の論述の中に認められる。これは、エロイーズとアベラールをめぐる「愛の聖化」の問題であり ── 性愛を媒介とする男女の関係の聖化によって、救済のストーリーを復権する試み ── 、同様のテーマが文学史において反復されてきたことが指摘される。この部分には大道敏子氏の強い主張が感じられるだけに、この部分が前後の議論とどのように関連するのかが不明瞭なこと、この愛の救済史の現代的意義はどこにあるのかについての論及が不十分なことが惜しまれる。

第二章では、サン＝シモンからデュルケムに至るフランス社会思想史の展開をたどりながら、近代的な産業社会という合理化と多元化を特徴とした社会における宗教機能の問題が論じられる。議論の中心は、実証主義的社会学に基づくサン＝シモンの宗教論とその伝統に立つデュルケムの宗教論の分析であるが、両者を貫いているのは「産業化に伴う社会統合の危機」と「宗教の意義」という問題意識である。宇都宮輝夫氏によれば、サン＝シモンにおいては産業社会の成立にいたる社会進化の前段階において不可欠の役割を果たしていた「宗教（聖職者）－軍人階級」が「実証科学－産業階級」に取って代られるという進歩史観と、個別主義を克服し統一性感情（連帯感）を可能にするという宗教機能の積極的評価という二つの異なった見解の間の微妙な揺れが見られる。この問題意識を受けて宗教論を展開したのがデュルケムであるが、氏はとくにデュルケムにおける「集合意識」概念の分析によって、社会統合に対する宗教的象徴体系の意義を論じている。以上の簡単な紹介からもわかるように、本章は宗教社会学をその問題意識の源泉に遡って論じたものであり、合理化と機能分化という現代のコンテキストにおいて宗教の統合機能を考える上で、示唆に富んでいる。氏はこの章の議論をデュルケムに限定するとことわっているが（六七頁）、この章を読んだ上で、こうしたフランス社会学における宗教論がヴェーバーらのドイツ社会学における議論 ── とくに合理化された近代社会における宗教機能の理解 ── に対して、どのような利点と限界を持つのかという問いを禁じ得なかった。

第三章では、前半で近代的自然科学の宗教批判についての一般的な見方（「科学と宗教の闘争」）が最近の科学史家の議論によって再考を迫られていることが論じられ、後半では具体的な問題として、近代の心霊研究とフロイトの精神分析学との関係、文化（思想性）という土俵における科学と宗教との関係が検討されている。この章は「宗教と科学」という最近わが国でも広い関心を集めている問題を扱ったものであり、とくに後半の心霊研究とフロイトの議論は、氏の問題意識を強く反映したものと思われる。この章に関する疑問は次の二点である。まず、前半（宗教の復権と近代的科学への批判という議論）に対して。

これは有名なクーンのパラダイム論とそれをさらにラディカルに展開したファイヤアーベントの議論に依拠として行われているが、今井道夫氏はパラダイム論の宗教学や神学への応用という最近の流行をどのように評価しているのであろうか。科学哲学において徹底した批判がなされ、クーン自身が持論を修正した現状において、クーンらの議論を批判的な検討なしに使用するのは十分な手続きと言えるであろうか。また、後半では、自然科学だけでなく人文・社会科学をも考慮するという観点から、心霊研究とフロイトが取り上げられているが、「科学思想と宗教との実りある交流の可能性」（一三三頁）を論じるために、とくにこれらの特殊な事例を取り上げる理由はどこにあるのであろうか。

続く第二部では、「現代」社会あるいは「現代」思想という共時的視点から宗教が論じられるが、扱われる問題自身はいずれも ── 言語論（第４章）、世俗化論（第５章）、医療問題（第６章） ──、決して周辺テーマではない。

まず第４章では、「最近」の言語哲学や言語学の成果に依拠しつつ、従来の歴史的批判的方法論に対する聖書研究の新しい方法論が論じられる。これは佐々木啓氏自身によるヨハネ福音書研究の方法論的反省に基づく議論と思われるが、新しい言語論が福音書理解や宗教理解に対して何をもたらし得るのかについて、様々な紹介がなされる ── とくに、物語テキストをめぐるチャットマン、リクール、エーコの議論（新しい物語テキスト・モデル） ──。こうした新しい理論の意義については、わが国でもペリン、パット、ハルニッシュらの研究書の翻訳などを通して、かなり広範に認知されているものと思われる。しかし、現在の状況は、歴史的批判的方法かテキスト世界の自律性か、通時か共時か、といった二者択一的問題設定の段階から次の段階に移っているのではないだろうか。こうした聖書解釈の「二つのモデル」の積極的な統合に関する議論は、残念ながら本章には見られない。また、紙面が許せば、最近の様々な言語理論の紹介だけでなく、これらの方法論によって従来の解釈方法では解明できなかった何が明らかにできるのかが、具体的な聖書テキストの分析に即して説明されたならば、さらに有益であったと思われる。

第５章の主題は「世俗化論」である。まず、世俗化をめぐる諸理論の問題点として、それらが世俗化現象を近代化過程における宗教変動としてとらえる点ではほぼ一致しているものの、宗教の現状と将来像の評価に関しては大きく議論がわかれていること、西欧キリスト教社会における社会変動を対象として形成された世俗化論が非西欧社会の宗教変動の説明に関して限界があることが指摘される。この章ではこうした点を視野に入れながら、社会変動一般を説明するために妥当な理論の提出が試みられる。そのために、櫻井義秀氏はまず本書の第三章の議論を、ベラ、ハモンドの市民宗教論の方向へ展開する。結論として、「多元化した社会には、従来の宗教的秩序による統合は不可能であり、世俗的な秩序、すなわち、法制度、市民の公共的道徳によって統合されねばならない。その際に、市民社会の世俗道徳は神聖さを帯びるはずである」（一八一頁）と述べられる。つまり、世俗の制度に聖なる価値が付与されるという「再聖化された世俗化論」である。これに続いて、むしろ社会統合は完全に世俗化されるとする議論 ── 宗教はもはや社会統合の機能をはたしていない ── として、パーソンズの機能主義的社会学を批判的に継承したルーマンのシステム論が紹介される。こうした宗教と社会統合機能の分離としての世俗化理解が、世俗化を「宗教の私化」としてとらえる知識社会学的あるいは現象学的社会学の宗教論（ルックマン、バーガー）にも密接に関連することは、氏の示す通りである。つまり、社会全体

に整合的な意味世界を付与し社会システムの維持に貢献する宗教から、機能分化した社会における「見えない宗教」への移行である。こうした議論を受けて氏が注目するのは、伝統的な宗教の影響力低下とそれ伴う規範的な霊観・救済観の崩壊を背景に、それまで周辺化されていた霊の世界（新霊性運動）が抬頭してくるという現象である。さて、これは現代の宗教現象を扱った著書の多くに感じる不満であるが、本章でも、新しい宗教運動の動向の分析に比べて、伝統的な諸宗教についての分析はほとんど見られない（ギルの言う「宗教社会学のパラドックス」）。世俗社会の宗教としていまだ大きな比重を占め続けている伝統的な諸宗教とその歴史的変動の理解に対して、本章に紹介された諸理論はどれほどの有効性を有するのであろうか。

最後の第６章は、現代医療に対する宗教的な癒しの持つ意義を扱っている。明治以降導入された自然科学としての医学は、一方で歴史上稀に見る長寿社会を可能にしたが、他方で、死に直面した人間の心の問題が医療の現場から排除された結果、「全体性の回復」としての癒しの問題は取り残されることになった。身体だけでなく、魂や心を包括した人間の全体性の回復という現代的課題に対して、澤田愛子氏は医療と宗教の積極的な関わり合いの重要性を論じる。まず、こうした視点から、諸宗教における癒しの機能の歴史的な検討がなされる。最初に取り上げられるのは、民俗宗教、とくにシャマニズムにおける癒しである。「シャマニズムが病や死に一定の解釈を与えることによって、病人とその家族はもちろんのこと、社会一般の不安もやわらげ、社会の安定という種族や共同体の保持にとってきわめて重要な役割を演じていた」という指摘は、医療人類学的研究によって多くの事例が紹介されている通りである。次にキリスト教における癒しが、聖書の疾病観の分析に基づいて論じられる。旧約聖書においては病は人間の罪に起因するものと考えられ、治療は罪の告白と神の恵に結びつけられていること、またイエスにおいては病の因果応報的解釈が排され、癒しの奇跡は神の国の始まりとして、病人の世話は愛の行為としてとらえられていることなど。続いて、初期キリスト教における病人などの弱者に対する愛の実践の広がり、修道院におけるホスピス（病人を含む訪問者への献身的な配慮）が紹介され、宗教改革以降もキリスト教的愛徳に基づく救療事業が継続され、現代のキリスト教的なホスピスが誕生したことが述べられる。最後に取り上げられるのが、日本仏教における癒しの歴史である。日本でも古くから大乗仏教の利他の教えに基づいた救療事業が盛んに行われた。とくに鎌倉仏教の時代は、「わが国の看護史においても黄金時代」と呼び得る時期であり（二二一頁）、とくに、日本型ホスピスの原型をなす死の思想として、『往生要集』『日本往生極楽記』の内容が紹介される。こうした歴史的考察に比較して、氏自身が述べるように、以上のような医療と宗教との癒しにおける積極的な関係が現代日本の医療の現場でいかにして可能になるのかについては明確な議論が見られない。しかし、これは、この問題自体の困難さによると言うべきであろう。

三

最後に全体から受ける印象を述べておきたい。本書はいったいどのような読者層を想定しているのであろうか。「あとがき」にあるように（二三三頁）、本書は、一方では宗教学固有の問題を整理して示すような教科書タイプの論述ではなく、むしろ「周辺」的（その意味では特殊な）テーマを扱うことを意図している。しかし、他方では、「初心者にも

十分理解できる」平易な解説が目指されている。この二つの目標を両立させることは決して容易ではない。本書全体から受けるのは、いずれの目標にも徹底しきれていないという印象である。「周辺」を扱うなら、もっと専門的な議論に集中した方がよかったのではないか、また初心者にも理解できるようにと言うなら、扱われた周辺的テーマの従来の宗教研究における位置づけについてもっと詳しい解説を行う必要があったのではないか。こうした印象は別にして、これまでも指摘してきたように、本書は、総論的概説ではないオリジナルな考察を含む各章から構成されている点で、この研究グループ全体の高い力量をいかんなく示している。書評者としては、多くの読者とともに、他日に約束されている「われわれなりの体系的構想」（同頁）に一日も早く触れることを希望したい。